浜松市生活支援体制づくり協議体（第２層、三方原圏域）　第２回会議　議事録

開催日時	令和３年11月30日（火）10時から12時まで
参加者	委員：15人（欠席者２人）　事務局：２人　その他：23人（都田地区：２人、高齢者福祉課：２人、北区長寿保険課：１人、地域包括支援センター三方原：６人、ケアプランセンター：２人、市社協地域支援課１人、市社協北地区センター4人、聖隷クリストファー大学ゼミ生５人）
場所	浜松市みをつくし文化センター2階　大研修室
内容	１．会長挨拶 前もって皆さんに宿題を出しそれを題材に話し合う。有意義な討議にして頂きたい。 ２．自己紹介（新任７人紹介） ３．協議内容 ①今年度の取り組み 「広報啓発」情報発信と担い手の確保 ②第１回の振り返り 各地区の情報共有　＊市社協HP掲載の議事録参照 ③グループワーク テーマ；若い年齢層への働きかけ（バトンのつなぎ方） 1)各地区で実施されている地域活動　20分 2)今の生活状況と生活課題　20分 3)求められるこれからの活動　20分 4)発表（5分×3地区） 【新都田地区】　発表者/M 新都田地区は平成５年にできた新興住宅地。住民がまだまだ閉鎖的なところがある。 地区社協で行った住民アンケートから、今の住民同士の距離感が心地よいと言っている方がいる。 この地区にあった住民同士のつながりの在り方を考えていく必要がある。 地域の特徴として、若い方が多くて高齢化率も18%位。同居世帯も50%位ある。 高齢者の問題は、同居の方が多く、上がってきにくい面がある。 同居の高齢者を、どういう風に地域の活動に引き出していくのかが課題。 閉鎖的な面もあるが、自分の身元等がはっきりすれば、フレンドリーになる地区。 初めが難しい。 同居で孫も近くにいて幸せと思っているが、日中は、家族が仕事や学校等へ出ていて独居になる。 こんなはずではなかったと思っている方もいる。 高齢者同士は、それなりにつながりがある。若い世代と同居の方とのつながりをどう作っていくのか。 昔からの歴史が浅く、神社・仏閣もなくて、地域の拠り所になるような物がないため、

	継続的に地域行事をして、住民同士のつながりを作っていくのは難しい。 過去には、運動会もしていたが、役員が「面倒くさいから辞めるかね」の流れになってしまったのか、そういう活動も、できては潰れてしまうことがある。 何か継続的な地域活動があると、住民同士の関わりも増えていくのではないか。 いろんな方が地域と関わり、出て行くことの重要性を、どういう風に伝えていったらいいのかと話がでた。 【都田地区】　発表者/M 昔は地域で集まる機会が多かったけど最近は減ってしまった。高齢者だけでなく若い人も同じ。伝達が遅くなった。情報が実際届いているのか分からない。 昔はスポーツとかで集まっていたけど、そういう機会もないのが理由。(コロナのせいだけではない) 家事支援やニコニコバスの情報共有も実際できているのか分からない。 朝の旗振りとかで外に出ていても、学校に行けてない子がいたりとか、家庭によっては情報が置き去りになっているのではないか。 昔は、隣のおじいさんが来て交流したが、今は世代の入れ替わりもあって、周りの人がどんな人なのか分からず難しくなっている。 現在の若い方で集まるのは祭りくらい。それもコロナでなくなりより付き合いづらく、周りが見えない状況になってしまった。 学生に若い世代はどう思っているのか聞いた。 若い世代は、お祭りなど先輩方が盛り上げてくれる。どぶ掃除等は行けてない。 理由は、部活をやることがメインで、お金が発生しないから。 正直、アルバイトで働いてた方が自分のためになるので、地域に出て行く必要性を感じない。地域として何かしらのつながりを続けることが必要。 【三方原地区】　発表者/N 今活動されているものが、コロナで 2 年間止まってしまった。徐々に再始動している。 家事支援事業は、狭間の世代があったり、同一敷地内に住んでいても、若い人に余裕がなかったりで、介護が必要になってようやく気づくことが多々ある。狭間の問題は難しいところが課題。 若い人にそういうところを担えるか。 学生は今まで地域にどういう関わりをしてきたか。 佐藤先生からも、この 20 年間学生と関わって、学生が感じてる関わりは大きく変化はない。 最近仲間が、SNS やネットとかで成り立っているところが特徴。 ただ、地域は第 2 の家族だよと感じている学生もいる。 SNS とかは、地域情報を知らせるものとして活用していく。 三方原地区社協で、ホームページを立ち上げたとか、ラインの講習会を実施されている中で、学生に入って貰い、得意分野を、苦手な人に教えていくみたいな事で、関わり合いをもつことから始めていくのもいいと意見がでた。

	施設の方からは、オンライン面会をコロナ禍でやって利用された方もいるが、対面が徐々に始まり、最近は、直接会うことが大切だと感じた。 最終的には、使い分けしていくことが大事ではないかと話がでた。 ④総評と今後への提案　　聖隷クリストファー大学 S 教授 どの変に焦点を合わせればいいか大変難しい。 時代としては、地域共生社会が国を挙げて福祉の政策になっている。 まず、一つは、縦割りを横につなぐが重要な課題。 今までは、高齢者は地域包括支援センター、障がい者は相談支援事業所、子育て支援は…のように縦に地域に出張った相談機関がある。それを統合して、ワンストップと言って、どんな問題でも一旦そこに入ったら 関係機関間の連携の中で解決まで何とか進めることが大きな課題になっている。 行政も含めての包括的支援体制。地域に出張っている相談機関間連携をバックアップしながら、制度の狭間問題を狭間にしないように、とにかくどこかで受け止めながら機関間連携を図って解決までもっていく。 もう一つは、住民参加が大きな課題になっている。 地域の支援を受けながら、いかにつながりを作り続けていくか。地域に期待がかかっている。 制度の狭間問題＝地域で、そこは違うだろうと思っている。そこは公的機関の中で何とか引き受けていく。 公的機関の支援を受けながら地域でできることを探り、できるだけ関係を継続しながら見守っていくのか。 その辺が地域でできることなのかなと思う。 全体的に、公助・共助・自助のくくりをすると、この間、生活自助原則（自己責任論）があったので、個人や家族が頑張るわけですが、一方で家族の在り方事態が随分変わってきている。 家族が近所に居ながら、家族機能を果たそうとせずに、地域に依頼してくるケースが出ている。 自助が自助として機能しないような社会かなと思う。研修で“家族の社会感が必要だ”が話題になった。 家族そのものの機能が失われているので、家族に代わるものを社会の中で作らなければいけない。 公助がこれ以上増やせないという現状。2025 年に向けて、団塊世代が 75 歳以上になる。今までに見たことのないような高齢社会がやってくる。介護が必要な人が出てくる。コロナ禍で経済状況も停滞する。 一人一人に、今までと同じだけの厚みのサービスを提供する見込みがない。要介護認定が厳しくなる。 制度が変わり特養入所に食費負担が増えている。介護保険料を払えない高齢者が増えている。

	公助がどこまで担えるか。公助を増やすのに、国民の負担と当事者の負担が増えていく。公助から漏れる人の問題が出てくる。 民生委員はもの凄くリアルに捉えていると思う。 自助がパンパンで自助できない。地域に漏れてくる。公助もできない。地域に漏れてくる。 そういう問題に対して、地域はいったい何ができるか。その問題を全部引き受けることはできない。 専門機関間連携、行政の支援の中で専門機関として最期まで追いかける。体制を整えながらその支援のもと、地域でできることを探っていく。各地域で作ってきた新たなる社会資源をどんな風に維持していくかが重要。 人をどんな風に各地域で確保していくか。 SNS 世代は、今から 15 年先には出てくるので、その人たちなりのつながりがある。 今の支援が必要な人たちは、まだそこまで辿り着いていない。顔の見える関係の中でいかにつながりを作っていくかになる。担い手をどうやって育てていくかが、難しいけど大事なところ。 65 歳定年後の人たちが地域の中で数も増えてくる。その位の年齢になると、自分の老後の問題を、もの凄くリアルに考えられる。世の中の現実にぶち当たった時、地域って向いてくるのではないかと期待している。 そういう人たちが、定年退職した後で、自分の力を活かす一つの場として、地区社協とか地域のサロン、家事支援等の活躍の受け皿はしっかり作っておくことがとても大切。退職間近な人のための講座を開いて少し吸収していく。ちょっとリアルに考えられたらと思う。 若い世代で学生が出てくるが、学生もコロナでアルバイト先がどんどん無くなって、経済的に非常に困窮している。その中で、はたして余裕のある学生がいるのかと実感している。 先程「アルバイトしている方が」の話になるのは、しかたがないと思っていただきたい。 SNS とか得意分野だったら、参加しやすいような形をアレンジすることにより、思いのある子は参加できる。 思いのある人をしっかり吸収する場を作る。場を作るのは専門職の役割である。 社協、地域包括、行政が一緒になって、地域の支援をしながら、いろんな人が活躍できる場を、作っていくことに少し力を入れていく。 ４．次回開催日程（案）について　　了承 令和 4 年 2 月 24 日（木）10：00～　みをつくし文化センター2 階大研修室 ＊事前打合せ；1 月 21 日（金）10：00～　北地区センターデイルーム （協議体正副会長出席） ５．その他 ・R3.住民主体による生活支援セミナー（3/17 開催）のお知らせ

	昨年度とても好評だった。コロナ禍で人数制限をして、多くの方をお断りした関係で、昨年度と同じ内容で別の会場で行う。 ・生活支援フォーラム（2/15 開催）のお知らせ　三方原地区社協 O 会長報告有。 ６．閉会の言葉　生活支援体制づくり協議体　I 副会長 少しづつ元の活動へという状況になってきている。 皆さんと話し合った内容をこれからの活動に活かしていきましょう。
今後の見通し等	・地域で活動されている方々の考え方、地域の現況や課題をしっかり受け止め、地域の方々との関係づくりを構築する。 ・できるだけ、人と人が関わり合える取り組み（場面や活動等）を沢山作り、つながりの拡充へと支援を進めていく。